
 論文

ロビンソンとマルクス

——価値および剰余価値論を中心として——

鈴木 重靖

目次

1. ロビンソンのマルクス批判
2. ロビンソンのマルクス評価
3. ロビンソンとマルクスの価値論
4. マルクスの価値論
5. マルクスの抽象的労働
6. マルクスの交換価値
7. ロビンソンとマルクスの剰余価値論
8. マルクスの剰余価値論
9. 投資と利潤率
10. ケインズ・ロビンソン・マルクス

1. ロビンソンのマルクス批判

「神学上の著作とともに、言語による創造物のうち、たぶんもっとも無益な、どのみち最も退屈なしろもの」、ケイインズは、トロツキーの言葉を利用しながら、マルクスの「資本論」をこのようにいっている¹⁾。ケインズは、このほかにも「資本論」を「時代遅れの経済学の教科書」²⁾とかイスラム経の教典「コーラン」³⁾とか呼び、「資本論」をまともな経済学書とは認

1) J. M. Keynes, "Trotzky on England", Collected writings, vol. X, New York and London, 1971., p. 67., 大野忠男訳, J.M. ケインズ, 「トロツキーのイギリス論」, ケインズ全集, 第10巻, 東洋経済新報社, 1980年, 87ページ。

2) J.M. Keynes, "A Short View of Russia", C.w., vol. IX, p. 258., 宮崎義一訳, 「ロシア管見」, ケインズ全集, 第9巻, 306ページ。

3) W.O. Thweatt, "Note: Keynes on Marx's Das Kapital", in J.C. Wood ed., "Karl Marx's Economics: Critical Assessment, vol. III, London, 1988, p. 1048.

めず、一種の宗教書と断じている。

ケインズ理論の普及者であり、また弟子でもある J. ロビンソンも、マルクスに対して多くの批判を行なっている。しかし、彼女は、師ケインズと違って、マルクスの書いたものを非科学的宗教書として、これを頭から無視したような態度はとっていない。むしろ、彼女はケインズがマルクスのものをまともに読みもせず、理解もしないで、彼を非難しているといっている⁴⁾。彼女はまた、ケインズとは違い、マルクスについて多くを書いているが、マルクスに対するその批判は詳細であり、しかも全体としては、マルクスに対して極めて高い評価をくだしている。

彼女のマルクス批判は多岐にわたっている。彼の価値論＝労働価値説からはじまって、剰余価値＝労働搾取論、窮乏化論、利潤率低下論、人口論などかなり広範囲におよんでいる。

価値論と剰余価値論に関しては後で述べることとして、窮乏化論については、ロビンソンは次のように述べている。「資本主義の下での労働者たちの‘増大する窮乏化’という予想は、一層疑わしいケースである。その予想がなされたときにはありえたかもしれないし、また30年代には失業がこれを復活させたかもしれない。しかし、今日ではこれは明らかに誤っている」⁵⁾。レーニンはこの困難を逃れようとして、先進工業国の労働者が比較的豊かなのは、この国の資本が植民地搾取によって高利潤を得、そのおこぼれをその国の労働者がもらうからだといっている。これに対して、ロビンソンは「この議論は、どうも弁護のための弁護のように、感じられる。……この議論は認めがたいように思う。資本家は、投資先がどこであろうとも、ほぼ同じ利潤率を期待する。したがって海外での利潤が高ければ、彼らは国内でそれだけ少なくしか投資しない。そこで国内の労働に対する需要は、海外の低賃金労働の存在のために減るのであって、ふえるのではない」⁶⁾といっている。そして、たとえ資本の植民地搾取のおかげで工業国労働者の賃金が上がるとしても、「このような形で説明できるのは、ほんの一部分とみるべきだろう。賃金が上がったのは、資本主義によって助長された著しい技術的生産力のおかげである」⁷⁾といっている。

ロビンソンの批判はほぼ当たっているであろう。しかし、植民地搾取と賃金上昇との関係については、マルクスに対する批判としては、不十分である。もっとマルクス自身の理論に沿った内的な批判が必要であろう。

マルクスの利潤率低下傾向の法則については、ロビンソンは、次のようにいっている。「こ

4) W.O. Thweatt, *ibid.*, p. 1048.

5) J. Robinson, "Marxism: Religion and Science", *Collected Economic Papers*, vol. III, Basil Blackwell Oxford, 1965, p. 154.

6) J. Robinson, "Marx, Marshall and Keynes", *C.E.P.*, vol. II, p. 14., 都留重人・伊東光晴訳, J. ロビンソン, 「マルクス主義経済学の検討」, 紀伊国屋書店, 1956年, 31ページ。

7) J. Robinson, *ibid.*, p. 14., 都留・伊東訳, 32ページ。

のようにマルクスの定式は単に s/v (剰余価値率) が与えられているならば、利潤率は産業の状況によって、騰落することを示しているに過ぎない。……利潤率低下についての彼の説明は結局なにも説明していない。』⁸⁾。ロビンソンは、有機構成 c/v も技術だけで変化するわけではないともいっている。ロビンソンのマルクスの利潤率低下についての批判は結論的にいって当たっているといってよい。しかし、この場合、マルクスが剰余価値率 s/v を不変と考えていたとロビンソンがみるのは正しくない。ロビンソンは、マルクスの剰余価値率不変という仮定では、生産力の上昇とともに実質賃金も高まるから、マルクスの窮乏化法則と矛盾するといっている⁹⁾。しかし、後でも触れるように、たとえマルクスが利潤率低下の法則を論じる上で、剰余価値率を一定と仮定していたとしても、理論の展開上そう仮定しただけであって、現実には剰余価値率は上昇していくと彼は考えていたとみるべきである。

マルクスの人口問題については、ロビンソンは次のようにいっている。「マルクスの人口問題に対する姿勢は現代世界に有害な遺産 (pernicious legacy) を残した (このことは彼にとってマルサスの反動的悲観主義を糾弾するために確かに必要であった。しかし、フランシス・ブレースを賛美することになったかもしれない)」¹⁰⁾、「マルクスは、マルサスの反動的教説とたたかうことに没頭して、資本主義の下での人口増加は労働者階級に不利であることを強調しなかった。ところが、彼自身の理論にしたがえば、このことは明白に正しいのである。』¹¹⁾。

ロビンソンがここでいいたかったことは、少なくとも先進国では、労働者階級の貧困と人口問題とは、マルクスのいうようには結びつかないということである。フランスのような先進国では人口はほとんど成長を止めているのである¹²⁾。ここでは、かつてフランシス・ブレースが主張したような貧困と結びついた人口問題による産児制限の必要はないということである。

ロビンソンは産児制限には批判的なのだろう。しかし、人口問題をただ貧困や産業予備軍あるいは失業の問題との関係においてだけしかみようとしないマルクスの過剰人口論は批判されるべきとしても、たとえ先進国といえども貧困層はあり、人口問題や産児制限の要求はありうるし、また社会的あるいは自然的出生数と死亡数との関係からみた人口問題の側面も全く無視することはできないであろう。この点に関してロビンソンはあいまいである。

ロビンソンのマルクス批判には、この他にマルクスの経済学における物理的産出高の測定の欠如、実質所得分析の不明確性、有機的構成といった重要概念のあいまいさ、また実質賃金と

8) J. Robinson, "An Essay on Marxian Economics", Reprinted by Orion Editions, 1991, p.p. 41~42., 戸田武雄・赤谷良雄共訳, J. ロビンソン, 「マルクス経済学」, 有斐閣, 1955年, 57~58ページ。

9) J. Robinson, *ibid.*, p. 36., 戸田・赤谷訳, 51ページ。

10) J. Robinson, "Marxism: Religion and Science", *op. cit.*, p. 154.

11) J. ロビンソン, 「開発と低開発」, 西川潤訳, 岩波書店, 1988年, 12ページ。

12) J. Robinson, "A Reconsideration of The Theory of Value", C.E.P. vol. III, p. 179., 山田克己訳, J. ロビンソン, 「資本理論とケインズ経済学」, 日本経済評論社, 1988年, 277ページ。

貨幣賃金との関係の取扱いの不十分さなどが指摘されている¹³⁾。

さらに、ロビンソンはマルクスの理論には宗教的性格があるといっている。この批判に関しては、ケインズと共通するところがある。しかし、同時にマルクスには科学的性格もあることをも強調している。この点ではケインズと完全に対照的である。しかも、ロビンソンの場合、このマルクスの理論における宗教性は、マルクスの理論そのものの中にあるというよりも、マルクスが説いている資本主義の崩壊や社会主義社会の到来の予言が、それに賛同する人々の間にマルクスの理論に対する信仰ともいえる絶対的信頼を生み、このことが結果としてマルクスの理論に宗教性を付与するのだと考えている。ロビンソンはいつている。「革命的運動は信念を必要とする。組織された集団は確立された正当思想を必要とする。マルクシズムの科学的側面は一つの信条 (creed) の要求へと転化せざるをえなかった」¹⁴⁾。「(資本主義の崩壊とか社会主義の到来とかいう) 予言はそれが真であると信じられるがゆえに信じられるのであって、有益であると信じられるからではない。そのとき、予言はドグマとなり、科学は神学に墮落する」¹⁵⁾。だが、マルクスの理論そのものの中に宗教性はないのだろうか？

上述のようなロビンソンのマルクスに対する批判は、その批判の仕方に若干の欠陥はあるものの、全体としては、当たっているであろう。ただ、一部を除いてその批判の大部分は、マルクスの理論の数量的欠陥に関するものであって、質的構造的なものに対してではない。マルクスの理論では測定が難しいとか、正確には計れないとか、値が違うとか、こういった数量に関するものが多い。これに対して評価の多くは、マルクスの経済学における資本主義経済の構造的な分析や歴史的な分析、またその動態的あるいはマクロ的理論に関して向けられている。そこで、次に、ロビンソンのマルクスに対する評価についてみてみよう。

2. ロビンソンのマルクス評価

ロビンソンはマルクスを批判しているが、それ以上にマルクスを高く評価している。後期になるほどこの傾向は強くなっていったようだ。ケインジアンである彼女は次のようにいつている。「同時に、ケインズの思考体系は限られた範囲の中だけで問題を展開している。彼はマルクスがとりあげた問題に全くふれず、……だから、ケインズの理論がマルクスのそれを補うのと同様に、マルクスの理論は、あるいは、ともかくマルクスがとりあげた問題のある種の理論は、ケインズの理論を補うために必要なのである。」¹⁶⁾と。

13) J. Robinson, "Marxism: Religion and Science" op. cit., p.p. 149~150.

14) J. Robinson, *ibid.*, p. 150.

15) J. Robinson, *ibid.*, p. 152.

16) J. Robinson, "Marx and Keynes", C.E.P., vol. I, 1960, p. 145., 都留・伊東訳, 「マルクス主義経済学の検討」, 60ページ。

この論述はマルクスの恐慌論に関して述べたものだが、その他、ケインズもその領域に入りこめなかった長期の資本蓄積の分析や、経済部門間の交換に関する論述なども評価すべきものとしてあげている。後者についてはアメリカにおける投入―産出分析の基礎を与えたものだと賛辞を送っている¹⁷⁾。これと関連して、ロビンソンは次のように述べている。「一例をあげるならば、マルクスの拡大再生産表式は、貯蓄と投資の問題や、資本財生産と消費財需要とのバランスの問題に対して、きわめて簡潔な、しかも実に不可欠な道具を提供したものである」¹⁸⁾と。

いずれにしても、ロビンソンによれば、「今日、アカデミックな教義が全体として空白であったところの興味ある諸問題―成長、不況、技術進歩、労働需要、拡大経済の部門バランス―の論争に対して、マルクス主義理論はスターティング・ポイントを提供したのである」¹⁹⁾。そして、最後に彼女はいつている。「経済学は長い間、新古典派の静態的均衡理論の箱の中に閉じ込められていた。ここでは、この対比（新古典派経済学とマルクス経済学との対比）は明らかである。マルクスに対してはるかに有利である。『資本主義の運動法則』を分析することのその適切さ、その視野の広さ、また洞察力は、限界主義者のスコラスティシズムを単純なつまらないものにしてしまっている」²⁰⁾。

ロビンソンのマルクス唯物史観に対する評価も高い。彼女はいう「生産力と生産関係との区別はマルクスの最大の功績の一つである」²¹⁾。ロビンソンは、マルクスが歴史の発展の基礎的原動力として経済的関係を重視したことを高く評価している。彼女はいつている。「思想の発展に対するマルクスの最大の重要な貢献の一つは、次のような思想上の見解、つまり意識や信念―特に社会科学の分野でのそれ―が、経済的利益の表現だという認識である」²²⁾。またいう。「昔のことにせよ、現代のことにせよ、どんな歴史的問題にしても、今日、これを見る場合に、その社会の経済的組織、階級的利益の相互作用および政治的事件の技術的發展への影響を考慮しない人はいないであろう。……この意味からすれば、われわれはすべてマルクス主義者である」²³⁾。

確かにマルクスのいうように、そして、ロビンソンがそれを高く評価しているように、経済的諸関係が歴史の推移に大きな役割を演じていることは否定できないであろう。しかし、経済

17) J. Robinson, "What Remains of Marxism?", C.E.P., vol. III, p. 163., 山田訳, 「資本理論とケインズ経済学」, 112ページ。

18) J. Robinson, "Marx, Marshall and Keynes", op. cit., p. 7, 都留・伊東訳, 前掲書, 15ページ。

19) J. Robinson, "Marxism: Religion and Science", op. cit., p. 149.

20) J. Robinson, ditto.

21) J. Robinson, "The Labour Theory of Value", C.E.P., vol. II, 1964, p. 51.

22) J. Robinson, "Marxism: Religion and Science", op. cit., p. 148.

23) J. Robinson, "What Remains of Marxism?" op. cit., p. 161., 山田訳, 前掲書, 109ページ。

的なものは、人間にとって生存に関係している次元においてのみ、つまり主として貧困層に頼るのみ、規制的作用を演じるものだろう。生存あるいは貧困を超えた次元では、むしろ人間を動かしているのは、他人や社会への支配欲ないし権力欲といったものであろう。巨大な富への欲求も富自体への欲求というよりも、権力欲の手段としてそれを要求すると見たほうが適当であろう。

なお、ここでちょっとロビンソンのレーニンおよびスターリンに対する評価に触れてみたいと思うが、ケインズはレーニン主義（スターリンについては無論と思われるが）を完全に宗教とみなしている。たとえばいっている。「レーニン主義は宗教であって、単なる政党ではないのであり、またレーニン主義はマホメットの教であって、ビスマルク的ではない」²⁴⁾と。ロビンソンはどうであろうか。実のところロビンソンはレーニンについては名指しで特に書いてはいない。しかし、レーニンの指導によるロシア革命を評価している点からして、彼女がレーニンにどちらかといえば、同情的であったとみてよいであろう。彼女はいっている。「(ロシア革命の) 第一の利益は、革命政府がひきついた時、その国の経済生活は意識的計画によって支配されており、改革目的も明らかであるということである」²⁵⁾。そして第二の大きな利点は、不労所得で生活する階級の人たちが収奪されてしまうことである。剰余のうち地主や金利生活者たちの高い生活水準を支えるのに用いられる部分は、投資に利用できる」²⁶⁾、「要約すれば、意識的な計画にもとづいて工業国を建設するという仕事は、民主的な政治機構の中で私企業の自由な活動のもとでよりも、革命政府によるほうが、はるかに容易に遂行しうるのである」²⁷⁾。

ロビンソンは、スターリンに対してはさすがにレーニンのようには彼を評価していないが、それでも、彼の行なった経済政策に対しては一定の評価をくだしている。彼女のいうところを聴こう。「スターリン主義の行き過ぎが、どれほど理想主義者の社会主義の訴えを傷つけたとしても、その実質的な成果を否定することはできない」²⁸⁾。

もし、ロビンソンが、ソ連や東欧諸国の崩壊という事実を知ったならば、スターリンの中央集権的社會主義の経済政策は勿論のこと、おそらくロシア革命やレーニン指導のボリシェビキ政府に対する評価も変えざるをえなかったかもしれない。しかし、残念ながらこの事実を知るまで、彼女は生き長らえることができなかったのである。

24) J.M. Keynes, "A Short View of Russia", op. cit., p. 257., 宮崎訳, 前掲書, 304ページ。

25) J. ロビンソン, 「マルクス主義を再検討する」, 都留・伊東訳, 「マルクス主義経済学の検討」, 67ページ。

26) J. ロビンソン, 同書, 68ページ。

27) J. ロビンソン, 同書, 70ページ。

28) J. Robinson, "What Remains of Marxism?", op. cit., p. 159., 山田訳, 前掲書, 107ページ。

3. ロビンソンとマルクスの価値論

ロビンソンはマルクスの価値論、その労働価値説をなんら科学的根拠のないものとして斥けている。彼女はマルクスが彼の資本論の第一章で述べているよく知られている文章を引用し、これを次のように批判している。マルクスは述べている。要約するとこうである。二つの商品、たとえば小麦と鉄とがある。その交換関係は一つの方程式たとえば1クォーターの小麦=aツェントネルの鉄というようにあらわされる。この方程式は小麦にも鉄にも同一量のある共通な第三のものが存在することを示している。この第三者は、小麦でも鉄でもそのいずれの使用価値でもない。したがって、残る属性は、ただ唯一つ、労働生産物という属性だけである。しかし、使用価値が捨象されているのであるから、その中に含まれている労働の有用な性質も、したがってまた、これらの労働の異なった具体的な形態も消失している。それらはもはや相互に区別されない、ことごとく同一の人間労働、すなわち抽象の人間労働に還元されてしまっている。この抽象的な人間労働の累積された結晶体が価値である²⁹⁾。

このマルクスの叙述に対してロビンソンは、「純然たる教条的論述 (purely dogmatic statement)」³⁰⁾であるといい、また「この中には論証のかけらすら見出すことは難しい。ここでは、価値は、価格を説明する価格以外の何物かであり、そしてそれ自身、さらに何物かによって説明されなければならないものである。したがって、それを労働時間によって説明することは、単なる一個の主張にすぎない」³¹⁾あるいは「証明を装った主張にすぎない」³²⁾といている。要するに「価値を生み出すのは労働だけだということは形而上学的な言葉である。その理論的な内容はたんに、労働は価値を生みだし、価値とは労働の生み出すものであるという定義にすぎない」³³⁾。

ロビンソンはまたいう。マルクスは価格のほかに価値を持ってきたために、価格論と価値論とを両立させなければならなくなり、価値と価格の一致とか、価値の価格への転化というパズルのような問題を生むことになる。「これがかの有名な『価値の価格への転形』問題である。それは現実には問題にならないが、分析上は謎であることはまったく明らかである。そして、それは、イデオロギーが代数学と混在しているがためにのみ問題となるように思われる。しか

29) K. Marx, "Das Kapital", Dietz Verlag Berlin, 1960, Bd. I., S. 41~42., 大内兵衛・細川嘉六訳, マルクス「資本論」, マルクス・エンゲルス全集, 23a, 大月書店, 1965年, 50~52ページ。

30) J. Robinson, "An Essay on Marxian Economics", p. 12., 戸田・赤谷訳, 17ページ。

31) J. Robinson, "Economic Philosophy", Pelican Book, 1970, p. 38., 宮崎義一訳, J. ロビンソン, 「経済学の考え方」, 岩波書店, 1967年, 58ページ。

32) J. Robinson, "The Labour Theory of Value", C.E.P., vol. I, 1962, p. 148., 山田訳, 「資本理論とケインズ経済学」, 1988年, 86ページ。

33) 「ロビンソン現代経済学」, 宇沢弘文訳, 岩波書店, 1978年, 39~40ページ。

しながら今日まで決して満足の行くように解決されなかった謎である」³⁴⁾。

ロビンソンはマルクスにかぎらず、労働価値説自体が誤っていると考えている。商品の交換は結局労働と労働との交換であり、これが交換比率を決定するということを論じた「アダム・スミスのビーヴァと鹿の物語は分析的にも歴史的にも何の根拠のないものである。彼はそれを道徳的先入観から導きだしたのである」³⁵⁾といている。しかし、労働価値説では、マルクスをも含め、国民所得とかその成長とかを計算することができない。これに関して彼女はいつている。「生産力や国民所得の成長というのは、財の産出量の流れと理解されている。そこで注目されなければならないものは、まさに、一人一時間当たりの物質的産出量の変化である。ところが、価値表示においては、あくまでも一時間は一時間である。一定の労働時間は年々同じ価値しか生産しない。しかし、問題はそこにあるのではない。われわれの知りたいのは、一定の労働時間がどれだけの物質を生産しているかということである」³⁶⁾。

このように、ロビンソンはマルクスの価値論、労働価値説をまったく認めていないのであるが、しかし、だからといって、これに基礎をおくマルクス経済学全体を認めないわけではない。前に述べたように、むしろ反対にこれを大いに評価しているのである。彼女はいつている。「相対価格論という狭い意味では、価値論はマルクス体系の核心ではない（マルクスもバームバベルクもそうだと信じていたが）。価値がそれらから完全に抹消されたとしても、そこに含まれている重要な事柄はなくならなであろう」³⁷⁾。さらにいう。「マルクスの理論のいかなる実質的部分（point of substance）も労働価値説によっていないことが明らかになるであろう」³⁸⁾と。だから、ロビンソンの立場からすれば、労働価値という概念があろうがなかろうが、マルクスの経済学体系の核心的、実質的部分は何ら影響を受けないのである。ロビンソンはいつている。

「これまで、マルクスに関する議論は主としてその労働価値説の批判に限られていたが」³⁹⁾、これを批判する正統派の経済学者も、それに答えようとするマルクス経済学者もともに、どうでもよいような「本質的でない議論を繰り返しているうちに、マルクスのもっとも大切な部分が、いずれの側から見失われてしまったのである」⁴⁰⁾。

34) J. Robinson, "A Reconsideration of The Theory of Value", op. cit., p. 175., 山田訳, 前掲書, 272ページ。

35) J. Robinson, "Economic Philosophy", p. 32., 宮崎訳, 48ページ。

36) J. Robinson, ibid., p. 45., 宮崎訳, 71ページ。

37) J. Robinson, "The Labour Theory of Value", op. cit., p. 148., 山田訳, 前掲書, 87ページ。

38) J. Robinson, "An Essay on Marxian Economics", p. 22., 戸田・赤谷訳, 26ページ。

39) J. Robinson, "Marx, Marshall and Keynes", op. cit., p. 6., 都留・伊東訳, 前掲書, 13ページ。

40) J. Robinson, ibid., p. 7., 都留・伊東訳, 15ページ。

4. マルクスの価値論

ロビンソンはマルクスの価値論を否定しているのであるが、これに関しては次のような問題が残っている。第一に、彼女は、マルクスの商品交換の等値式からは、彼のいう第三者的共通物としての抽象的人間労働とか価値とかの存在は証明できないといって、これを単なる形而上学的主張にすぎないと排除している。しかし、何故証明できないのかについて全く説明していない。彼女もまた単にそう主張しているにすぎない。ただ、彼女からうかがい知ることができるのは、価値からは価格は説明できないということ、また価格を計るのに価値という概念は全く不必要だということだけである。勿論、これだけでは価値や抽象的労働が存在しないことを証明することにはならない。

第二に、ロビンソンのマルクスの労働価値説の理解は、基本的にいって、スミスやリカードなどの古典派の労働価値説の理解の枠を超えていない。彼女は、マルクスが古典派の労働概念を抽象的人間労働という概念にまで純化した意味を十分理解していない。このことは、彼女がマルクス批判の過程でスミス批判をしていることから伺われるが、単に価格の説明や経済諸量の尺度として労働価値概念は不必要だというだけならば、別に、マルクスの労働価値説だけを特に取り上げて、くどくどと批判する必要はない。労働価値説一般を批判すれば十分である。

第三に、ロビンソンはマルクスの価値論を価値と価格との不一致、つまり価値と価格との関係という観点からのみ批判して、価値と交換価値との関係という観点から、したがってまた交換価値と価格との関係からこれを批判していない。しかし、マルクスにとっては、価値と交換価値＝価値形態との関係、また、それと価格の関係は本質と現象あるいは実態と現象との関係として、彼の価値論において重要な地位を占めているのである。これに対する批判を抜きにしては、マルクス価値論を十分理解した上での批判とは言い難い。

第四に、ロビンソンは、マルクスの労働価値論をまるで無駄なデキモノのようなものと考え、これさえ取り除けば、彼の全体系は立派な素晴らしいものであるかのようにみている。しかし、果たしてそうだろうか。マルクスにとって価値論は血のような大切なものではないのだろうか。

まず、第一の問題から見てみよう。確かに、ロビンソンのいうように、マルクスの設例1クォーターの小麦＝a ツェントナーの鉄という等式からは、抽象的人間労働とか価値とかの存在を証明することはできない。しかし何故だろうか？ロビンソンは答えていないが、答えは簡単である。大体この等式は1人の太郎＝2人の次郎という等式と同じであって、全く等式としての意味をなしていないからである。1人の太郎＝2人の次郎という等式は太郎の身長が次郎2人分の身長に等しいというのか、体重においてそうだというのか、それとも算数の成績についてそうだというのか全く分からないのである。つまりこの等式は等式として成立しないものである。もし等式として成立させようとするならば、1人の太郎の身長＝2人の次郎の身長、1人の太

郎の体重 = 2 人の次郎の体重, あるいは 1 人の太郎の算数の成績 = 2 人の次郎の算数の成績等々としなければならない。

同様に, 1 クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄という等式を提示されても, われわれは, この等式が何を意味しているのか分からないであろう。これでは, 1 クォーターの小麦の重量と a ツェントナーの鉄の重量が等しいというのか, それとも体積が等しいというのか, あるいはまた値段が等しいというのか, この等式では何ら提示されていないからである。ただマルクスが勝手にこれは商品交換における交換価値ないし価値の等値関係を表示しているのだといっているにすぎない。

もし 1 クォーターの小麦の値段が a ツェントナーの鉄の値段に等しいというならば, 等式として成立させるためには, 1 クォーターの小麦の値段 = a ツェントナーの鉄の値段としなければならない。マルクスは二つの商品の交換価値が等しいといっているのであるから, 1 クォーターの小麦の交換価値 = a ツェントナーの鉄の交換価値としなければならない。こうして初めて等式として意味があり, 等式として成立するのである。もし, ここで, 交換価値の代わりに価値として, はじめから 1 クォーターの小麦の価値 = a ツェントナーの鉄の価値という等式にするならば, いまさら小麦でもない鉄でもない第三の共通物として価値とか労働とかをもってくる余地もなければ必要もない。このままで等式は完全に成立しているのである。もっともこの場合, 価値という概念を持ってくることで自体が不必要になるだろう。

マルクスが 1 クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄という等式をもってきて, 何か第三の共通物として価値とか労働とかを引き出そうとするのは, 1 人の太郎 = 2 人の次郎という等式をもってきて, たとえば, 第三の共通物として太郎でも次郎でもない算数の成績一般というものをもってくるに等しい。しかし, 算数の成績一般というものは存在しないのであって, あるのは太郎のそれであり, 次郎のそれである。太郎の算数の成績は太郎独自のものであって, 別に次郎の算数の成績がなくても存在するものである。次郎の算数の成績にしても同様であって, 太郎の算数の成績がなくても存在するものである。それらが後で対比されてみてはじめて, 太郎の成績が次郎の成績の 2 倍であるということが分かり, 1 人の太郎の算数の成績 = 2 人の次郎の算数の成績という等式が成立するのである。

全く同様に, 小麦の交換価値でも鉄の交換価値でもない交換価値一般といった物は存在しないのであって, それぞれの商品はそれぞれ独自の交換価値を持っているのである。別に相手の商品の交換価値が存在しなければ存在しないといったものではない。双方が市場で対比されてみて分かるのは, それぞれの商品の交換価値の大きさそのものではなくて, その大きさの比較である。たとえば, 1 クォーターの小麦の交換価値は価格で表示して 500 ドルなら 500 ドルということは分かっており, その額が, これも既に分かっているところの a ツェントナーの鉄の交換価値 500 ドルと対比されて後に, 両者の大きさが等しいということになり, ここに 1 クォーターの小麦の交換価値 = a ツェントナーの鉄の交換価値という等式が成立するのである。

ここで問題とされている商品交換は、原始社会の物々交換ではないのである。マルクス自身が資本論の冒頭でいっているように、「資本主義経済が支配している」ということを前提にした商品交換＝市場なのである。したがって小麦と鉄とが交換されてはじめて、あるいは交換状態に入ってはじめて、それぞれの交換価値の大きさが決まるとか分かるとかいったものではない。それぞれの商品はそれぞれ市場へ登場するまでの過程で、需給の状態等に影響されながら独自の交換価値をもつようになるのである。

このように、マルクスによって商品交換から導き出された等式は、等式として意味もなければ成立もしないものであって、したがってこの等式を根拠としてこれから抽出し、その存在を確認しようとした彼の価値存在やその実態としての抽象的労働の存在の証明方法は完全に失敗したといわなければならない。残念ながらロビンソンはこれをやっていない。彼女はただ証明できていないと主張しているに過ぎない。これでは、マルクスの価値論をその存在自体から理論的に批判したことにならないだろう。

5. マルクスの抽象的労働

第二の問題に移ろう。労働価値説というものは、それがスミスのものであろうとリカードのものであろうと、労働の搾取という概念と結び付く可能性がある。というのは、この説は価値を生むのは労働だけだと考えており、したがって、価値を受け取る権利があるものは本来労働するもの、つまり労働者だけであり、他のものは、価値を受け取るとしても、それは、労働者から分けてもらうに過ぎないとみるからである。

それにもかかわらず、スミスやリカードは資本家階級による労働者階級の搾取ということについて明言しなかった。リカードは投資→機械化が労働者を排除するという点で、資本家と労働者との対立関係にある程度気がついてはいたけれども、地主と資本家との対立ほどそれを重視しなかった。その理由は、彼らの個人的生活環境からくるものはこれを別とすれば、一つは、彼らが生きていた時代が資本主義の形成期あるいは発展期にあり、労使の対立関係はまだそれほど明確ではなく、資本主義の発展は労働者階級にも不利な環境ではないと考えられていたということ。

もう一つの理由は、彼らが考えていた価値を生む労働とは、ピンをつくる労働とか靴を作る労働とかであって、それぞれ異なった支出形態をもつところの現実存在する労働のことを意味していたということ。これらの労働はまたピンや靴をつくるために、それぞれ異なった道具や機械また原材料を使わなければならない。これらの生産要素なしには、したがってまたこれらの生産要素の提供者なしにはこれらの生産物ができないことは明らかである。ここでは、ピンや靴といった価値を持ったものをつくるためには、労働の提供者である労働者とこれらの生産要素の提供者である資本家との協力が必要となる。

つまり、ここでは労働者と資本家との協力関係は存在しても、対立関係や搾取関係は存在しないことになる。(なお土地という生産要素の提供者である地主についても同様な関係が労働者ないし農民との間にあるわけであるだが、土地については、これは本来自然によって提供されたもの、つまり提供者は自然そのものであるという考えがスミスなどにもあり、地主については資本家あるいは企業家に対するほどの協力関係を見ていないようである)⁴¹⁾。

もし、価値物を生産することにおいて、労働者と資本家との間に協力関係ではなく、対立関係や搾取関係を見出そうとするならば、せいぜい形式的なあるいは抽象的な生産要素との結合だけを想定すれば十分な、具体的な形をもたない抽象的な労働という概念を考えだす必要がある。このことによってのみ、資本や土地したがってまたその提供者である資本家や地主を、完全に価値生産から、また価値生産への何らかの貢献ないし関与から排除できるのである。

スミスやリカードはこのような労働を考えだすことはできなかった。というより、考えだす必要はなかった。何故なら、スミスにしてもリカードにしても資本主義社会を否定すること、つまり労働者階級と資本家階級との根本的対立によって資本主義社会が崩壊していくであろうという理論あるいは思想をもっていなかったからである。しかし、マルクスにはこのような労働を考えだすことができた。というより、考えだす必要があったし、むしろこのことは、彼にとって、いわば至上命令であったとすら云えるのである。何故なら、彼は資本主義社会の崩壊と社会主義社会の到来を予言した思想家であり、またそのために運動をしていた革命家であったからであり、さらに、既に、自分がエンゲルスとともに考え出していた唯物史観において、資本主義社会における資本家階級による労働者階級の搾取と両階級の相いれない敵対関係＝階級闘争を説いていたからである。

マルクスはスミスやリカードと違って、使用価値をつくる労働と価値をつくる労働とを完全に分離した。そして前者を具体的労働 (konkrete Arbeit) あるいは具体的有用労働 (konkret nützliche Arbeit) と呼び、後者を抽象的労働 (abstrakte Arbeit) あるいは抽象的人間労働 (abstrakt menschliche Arbeit) と呼んだ。具体的労働は実際のピンだとか靴をつくる労働であって、異なる生産手段つまり機械や道具または原材料を使って、ないしその異なった利用によって、異なる支出形態をもつ質的に違った労働である。これに対し抽象的労働とは「人間の脳や神経や手などの生産的支出」⁴²⁾「生理学的意味での人間の労働力の支出」⁴³⁾のことであり、「どのようにしてまたどんな (Wie und Was) ということは問題とならず、ただどれだけ (Wieviel) ということのみが問題」となるような、つまり「質をもたないで量だけをもつ」⁴⁴⁾ような、「無差別な人間労働の、すなわちその支出形態にはかかわりのない人間労働力の支出」⁴⁵⁾

41) アダム・スミス、「国富論」、第一編、第6章、大内兵衛訳、岩波文庫(一)、1951年、104ページ。

42) K. Marx, "Das Kapital", Bd. I, S. 48., 大内・細川訳、マル・エン全集、23a, 59~60ページ。

43) K. Marx, a.a.O., S. 51., 邦訳、同上、63ページ。

44) K. Marx, a.a.O., S. 50., 邦訳、同上、61ページ。

45) K. Marx, a.a.O., S. 41., 邦訳、同上、52ページ。

「人間労働一般の支出」⁴⁶⁾といった、そういう労働のことである。

このような労働と結びつく生産手段は全く具体性のないものであって、何でもよく、およそ生産手段の名に値しないものである。というより、それと結びつく生産手段など考える必要のない労働である。何故なら、ただ脳や筋肉や神経や手を支出しているだけならば、それは単に人間が動いている、エネルギーを支出しているというにすぎない。これだけならば、猿でもできることである。「人間」とか「生産」とかいう言葉を付したからといって、この言葉を付けられた労働が、人間の労働になったり、生産的労働になったりするわけではない。マルクスはこの労働と結びつく生産条件は「現存の社会的に正常な生産条件」⁴⁷⁾などといっているが、これは単に言葉を加えただけで、何ら意味のあるものではない。

ここでマルクスによって描かれている労働とは、彼自身がいつているようにまさに「まぼろしのような (gespenstig)」⁴⁸⁾存在である。およそ「質をもたず量だけしかない人間労働一般」などというものは、統計上は考えられるとしても、客観的な存在ではなく、マルクスの頭の中でのみ存在するに過ぎないものである。マルクスがこのような労働を考え出したのは、というより考え出さずにおられなかったのは、資本家が生産手段を提供することによって、使用価値の生産には関与するが、価値の生産には全く関与せず、ただそれを奪い取るだけであると云うこと、また資本主義的商品生産のもとでは、労働者の労働は抽象化され、非人間化されてしまうということを云いたかったからにはかならない。

だから、マルクスの労働価値説はスミスやリカードのそれを、投下労働価値説としてただ純化させたものだとしか見ていないロビンソンの見解は誤っている。両者は、根本的に違うのであって、一方は現実的な労働であり、他方は架空の抽象化された労働である。また一方は資本主義を肯定する基礎としての価値論であり、他方は資本主義を否定する用具としてのそれである。したがって、スミスもリカードもマルクスもこれを一把一からげにして、労働価値説は無用であるとし、このかわりに他の尺度をもってきて解釈し直せばよいといって、マルクスの上述の資本主義に関する諸理論をそのまま認めるというロビンソンのやり方は、あまりに安易にすぎるものといわざるをえない。

6. マルクスの交換価値

第三の問題、つまり交換価値についてであるが、ロビンソンはマルクスの価値論を価値と価格との関係という視点からのみしか批判していないが、マルクスにとっては、その中間に交換価値という極めて重要な概念が存在するのである。これを抜きにしては、マルクスの価値また

46) K. Marx, a.a.O., S. 49., 邦訳, 同上, 60ページ。

47) K. Marx, a.a.O., S. 43., 邦訳, 同上, 53ページ。

48) K. Marx, a.a.O., S. 42., 邦訳, 同上, 52ページ。

価格の理論を正しく理解できないし、したがってまた正しく批判することはできない。

実のところ、マルクスは、商品の商品たらしめているところのその交換価値を、全くといっていいほど理解していなかった。そのため彼は、一方では、価値という存在もしない架空のものを作りださざるをえなかったし、他方では、金属主義という今日ではおよそ非現実的な貨幣論におちいつてしまったのである。マルクスの交換価値理解の誤りは、次の言述に明瞭にあらわれている。「ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、 x 量の靴墨とか y 量の絹とか、 z 量の金とか、要するにいろいろに違った割合の他の商品と交換される。だから小麦は、さまざまな交換価値をもっているのであって、ただ一つの交換価値をもっているのではない。しかし、 x 量の靴墨も y 量の絹も z 量の金その他もみな1クォーターの小麦の交換価値なのだから、 x 量の靴墨や y 量の絹や z 量の金などは互いに置きかえられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。」⁴⁹⁾。

小麦がいくつかの他の諸商品と交換されるからといって、小麦がさまざまな交換価値をいくつももっているわけではない。小麦はそれに独自の交換価値（それは時と場所によって変動するけれども）をもっているのであって、交換される商品の数だけの交換価値をもっているのではない。靴墨や絹や金などの他の商品にしても全く同じである。それぞれの商品はそれぞれ独自の交換価値をもっており、上のマルクスの説明からすれば、それらが互いに市場で比較され、あるいは交換される状態になっているということを示しているにすぎない。ここでは、これらの諸商品に共通な第三者的存在としての価値だとか抽象的労働とかが入る余地など全くない。

1クォーターの小麦の交換価値が z 量の金だから、したがってまた、 x 量の靴墨や y 量の絹の交換価値も z 量の金だから、そしてまたその金の使用価値の性質が貨幣の役割に適していたから、このような関係が拡大して金が一般的交換価値（＝価値形態）として、その後、小麦など諸商品の貨幣に選ばれた—マルクスは価値形態論でそのように論理を展開している—のではない。他の諸商品がそうであるように、金も金として独自の使用価値と交換価値とをもっているが、この金の独自の使用価値と交換価値—たとえば、等品質で耐久性があり、少量の使用価値で多量の交換価値をもつといった性質—が、他の商品の（交換）価値の尺度として、流通手段として、あるいは蓄蔵手段として比較的適応していたから、ある時期、ある場所で、ある範囲内において、金が貨幣としての役割を果たしたのである。マルクスの交換価値の理解ではこのようなことは全くわからない。ロビンソンもこういったことについて何らふれていない。

第四の問題、つまりマルクス労働価値論のマルクス経済学体系における位置づけについては、以下の論述で明らかになるであろう。

49) K. Marx, a.a.O., S. 41., 邦訳, 同上, 50ページ。

7. ロビンソンとマルクスの剰余価値論

ロビンソンはマルクスの剰余価値論について次のように云っている。「マルクスに対する新古典派の批判者は、労働価値説を誤解していた。労働価値説が、労働のみが価値を創造するものであるから、労働者はその生産物のすべてを所有する権利をもつ、利潤が搾取から得られるとするならば、利潤は悪であるということを主張していたと理解したのであった。その論争の大部分は、この点に向けられたが、これはマルクスによって主張された理論ではなかったのである。確かに、搾取は口汚い言葉である。マルクスは、道徳的噴りにみちた言葉を使ったが、かれの分析の理論は、利潤が投資の源泉である—蓄積が望ましい限り、搾取は必要となる—ということを示すだけであった」⁵⁰⁾。搾取という言葉は確かに好ましくない。しかし、搾取と搾取率とは違うと彼女はいう。「搾取率はマルクスの分析体系の基礎であって、形而上学的なものではない。搾取率は、経済全体についての純利潤と賃金との比率である。はかり方について多少問題があるとしても、これは事実に関わるものであって、定義にかかわるものでない。」⁵¹⁾。「搾取率は公衆（つまり勤労者たち）や社会的サービス、防衛および行政への販売のために生産された財の価値と剰余を吸収する投資との間の関係としてあらわされる。ここでは、租税と利潤との区別は消えており、言葉の通常の意味では、剰余は搾取とは同じ大きさではない—公衆は政府支出から直接恩恵を受けているのだから。」⁵²⁾。

ロビンソンによると結局、マルクスの剰余価値の問題はこういうことになる。マルクスの労働の搾取＝剰余価値論は彼の価値論から導きだされたものである⁵³⁾。しかし、これを搾取率＝剰余価値率とみれば、労働価値というゴムひものような不正確な尺度で計られているので数字的には若干修正を要するとはいえ、それは国民総生産あるいは国民所得に占める利潤と賃金との分配比率の問題であり、資本主義制度が所有階級にどれだけの剰余総量を得さしめるかという問題であり⁵⁴⁾、また利潤からどれだけ投資が行われるかといった問題として解釈しなおすことができるのである。

こういうふうにみれば、「マルクスの理論をその他のそれから区別するものは、決して商品の相対価格の問題ではなくて、資本の総供給の問題であり、また全体としての資本に対する利潤率の問題である。この問題こそが、マルクスとケインズ以前の教壇経済学者との間のいちじ

50) 「ロビンソン現代経済学」, 前掲書, 245～246ページ。

51) 同書, 40ページ。

52) J. Robinson, "What Remains of Marxism?", op. cit., p. 166., 山田訳, 前掲書, 115ページ。

53) J. Robinson, "A Reconsideration of The Theory of Value", op. cit., p. 174, 山田訳, 前掲書, 271ページ。

54) J. Robinson, "An Essay on Marxian Economics", 戸田・赤谷訳, 20ページ。

らしい相違なのである」⁵⁵⁾というロビンソンの言葉も、彼女の立場からすれば当然かもしれない。しかし、マルクスの剰余価値論や利潤論について、このようにケインズ主義の側になつて、解釈し直すということは、ロビンソンにとっては有り難いことかもしれないが、マルクス自身にとってもそうだといえるだろうか。マルクスにとってはかえって迷惑かもしれない。

8. マルクスの剰余価値論

ロビンソンは、剰余価値したがってまた利潤と賃金との関係は、生産された価値（付加価値）を労働者の受け取る部分と資本家が受け取る部分とに配分するという関係のようにいっているが、マルクスがこの問題について考えていたことはこういうことではない。ロビンソンはこの関係からマルクスのいう搾取という概念を取り去り、若干の数字的修正を加えれば、事がすむようにいっているがそうではない。搾取という考え方だけが問題なのではない。勿論これも問題ではあるが、同時に賃金と利潤の源泉が根本的に違うということが問題なのである。

マルクスによれば、賃金の大きさは資本家に雇用されるまえに決定されており、また資本家は労働者を雇用するときにその額の賃金を支払わなければならない。というのは、マルクスによれば、労働者が資本家に売るのは労働ではなくて労働力だからである。ここでは、他の商品と同様に、販売と購買が成立するときに、商品（労働力）の購入者（資本家）はその販売者（労働者）にその価格（賃金相当額）を支払なければならない。だから、資本家が労働者に支払う賃金額は、本来資本家はその雇用した労働者を働かすより以前に持っていた資金の中からでなければならない。それを労働者が一定期間働いた後に支払うのは、労働者側からすれば、信用売りであり、資本家側からすれば信用買いということになるのである。これにかんしてマルクスはいつている。「労働力の価値は他のどの商品の価値とも同じように、労働力が流通に入る前から決定されていた。……資本主義的生産様式が行われる国ではどの国でも、労働力は、売買契約で確定された期間だけ機能してしまったあとで、たとえば各週末に、はじめて支払を受ける。だから、労働者はどこでも労働力の使用価値を資本家に前貸するわけである。労働者は、労働力の価格の支払を受ける前に、労働力を買い手に消費させるのであり、したがって、どこでも労働者が資本家に信用を与えるのである。」⁵⁶⁾

このように、マルクスの思考によれば、賃金の出所と剰余価値（利潤）の出所とは違うのである。（もっとも、マルクスが考えるように、結局は、資本家の資産はすべて労働者の搾取によって成立つのだということになれば、資本家にとってはこの問題はいつでもよいことになるが。）ロビンソンのいうのとは違って、生産された所得が労働者と資本家にどのように配分されるかということは、実は問題にはならないのである。労働者が雇用される以前に賃金の大き

55) J. Robinson, "Marx and Keynes", op. cit., p.139, 都留・伊東訳, 前掲書, 50ページ。

56) K. Marx, "Das Kapital", Bd. I, S. 182., 邦訳, マル・エン全集, 23a, 227~228ページ。

さは決定されており、雇用契約の成立と同時に本来賃金は支払れているはずのものであるから、資本主義的生産において問題となるのは、ただ、労働者をどれだけ働かせることによって、剰余価値（利潤）の大きさをどの程度にするかということだけである。

マルクスは、賃金は労働の価値・価格ではなく、労働力の価値・価格であること、そして資本主義経済のもとでは、この両者の関係が転倒して現れることを実にくどくどと述べている。勿論この考えは誤っている。今日では、賃金は労働ないし労働の成果に支払われるものである。（ロビンソンは労働力が価値どりに売られるというマルクスの考えには反対しているが⁵⁷⁾ 賃金が労働力の価値〔価格〕＝生活費であるという考えそれ自身には必ずしも反対していないようだ。この点あいまいである。）

マルクスの労働力価値＝賃金という誤りは、彼の労働価値論からきている。確かに、労働価値論からすれば、「労働の価値」という表現は「不合理な表現」⁵⁸⁾であり、「同義反復（Tautologie）」⁵⁹⁾にしかすぎない。それはまた、「土地の価値」という表現と同じように「想像的な表現」でもある⁶⁰⁾。しかしまた、「労働力の価値」というのも、「不合理な」あるいは「想像的な」表現でしかない。何故なら労働力というものも、自然の土地と同様に労働生産物ではなく、したがって価値対象物にはならないからである。いずれにしても、マルクスの賃金論は袋小路に陥った矛盾だらけの概念である。その原因は彼の労働価値論にあるのだ。

だから、マルクスにおける賃金（必要労働）と剰余価値あるいは利潤（剰余労働）との関係、したがってまた資本家による労働者の搾取という問題は、単に与えられた付加価値というパイを労働者と資本家との間でどのように配分するかという問題ではないのである。マルクスにおいては、賃金は、雇用される以前に、その時の社会的経済的状态によって決定されており、これについては、資本家といえども、勝手に変えることはできないのであり、資本家ができることは、自分の購入した労働力という商品をどのように消費するか、つまり労働させるかということだけなのである。賃金は資本家にとってはコストであり、コストを増やしたり減らしたりすることはできても、賃金の大きさそのものを決めることはできないのである。

このように、マルクスを正しく理解するならば、剰余価値（と賃金との関係）の問題を、生産された価値（所得あるいは付加価値）を資本家と労働者の間に配分する問題だとみるロビンソンの理解は、正しくないあるいは少なくとも極めて不正確といわなければならない。

57) J. Robinson, "Marx, Marshall and Keynes", op. cit., p. 13., 都留・伊東訳, 前掲書, 29 ページ。

58) K. Marx, "Das Kapital", Bd. I, S. 564., 邦訳, マル・エン全集, 23b, 699ページ。

59) K. Marx, a.a.O., S. 560., 邦訳, 693ページ。

60) K. Marx, a.a.O., S. 564., 邦訳, 699ページ。

9. 投資と利潤率

マルクスの剰余価値率やそれと直接関連する利潤率また投資に関する理論を、ロビンソンが自分の都合のよいように解釈していることは、次のようなことからもうかがわれる。

ロビンソンは、マルクスが搾取率を独立の与件であり、利潤率はそれから導きだされるものと考えており⁶¹⁾、またその際、搾取率一定という前提に立っているものとみている⁶²⁾。しかし、マルクスは搾取率＝剰余価値率を不変と考えでいたわけではない。利潤率その他の議論を進める上で論理を単純化するために、時に応じて、便宜上そう仮定したにすぎない。もっとも、その仮定が時に事実と混同されるようなことがあるにはあったけれども。式であらわしてみると次のようである。 ρ ：利潤率、 M ：剰余価値、 V ：可変資本、 C ：不変資本（またはそれに可変資本を加えたもの）、 T ：単位労働日、 L ：単位日生活費とすると、

$$\rho = (M/V) \times (V/C) = M/C \quad (1)$$

ここで、 M/V は剰余価値率であり、 V/C は有機構成（の逆数）である。マルクスは特別の実証的あるいは理論的根拠があったわけではないが、むしろ思想的願望から、剰余価値率（ M/V ）の上昇率よりも有機構成の上昇による V/C の下落率のほうが大きいと考えて、利潤率 ρ の低下傾向の法則を導き出したのである。マルクスの体系全体の脈絡からすれば、剰余価値率は上昇するはずである。何故なら、 $V=L$ とみることができるので、 $M=T-L$ となり、剰余価値（ M ）は、ある相応する単位期間の労働時間（ T ）と生活費（ L ）との従属変数であり、生産力の上昇とともに L は低下する傾向にあるから、 M も上昇する（相対的剰余価値の生産の増大）傾向にあるといっている。式であらわせば、（1）は（2）または（3）のようになるのである。

$$\rho = [(T-L)/V] \times V/C \quad \text{or} \quad (2)$$

$$\rho = (T-L)/C \quad (3)$$

ロビンソンが剰余価値率を一定値とし、これを独立の与件と考えたのはマルクスを正しく理解していない証拠である。

ロビンソンは、マルクスが資本家は剰余価値（利潤）部分から投資を行なうということを述べ、あるいはさらに進んでこれを理論づけた、といってこれを高く評価している。確かに別にマルクスがいうまでもなく、投資のかなりの量は利潤部分から行なわれる。これは、企業の自己収益からの投資である。しかし、今日では賃金部分からもかなり投資は行なわれている。特

61) J. Robinson, "A Reconsideration of The Theory of Value", op. cit., p. 176., 山田訳, 前掲書, 274ページ。

62) J. Robinson, "An Essay on Marxian Economics", p. 38., 戸田・赤谷訳, 54ページ。

にわが国のように、個人貯蓄が大きな額を示すところでは、そうである。ロビンソンもこのことを知らないわけではないだろうが、やはり多くの場合、投資は主として企業が行なうものと仮定して理論を進めている。この点では、彼女はマルクスの考えに同調している。

しかしマルクスの場合、単に投資が主として利潤部分から行なわれるといった量的な事実が問題なのではない。投資は利潤部分からでなければならないのである。賃金部分から投資が行なわれることは原理的にあってありえないのである。何故なら、賃金は労働力を再生産するための生活費であって、それ以上でも以下でもなく、賃金から投資のための資金を出すことは原理的に不可能だからである。賃金はただ労働者を労働者として再生産するためのだけのものなのである。つまり労働者は賃金という形態で自己を労働者として運命づけているのである。

われわれは普通賃金から生活費を支払う、賃金のある部分をもって生活費を賄うものと思っている。しかし、マルクスの立場からは全くこれは違うのである。労働力を労働力として維持するための生活費を賃金という形式で労働者は資本家からもらっているに過ぎないのである。労働者が労働力を資本家に売っているかぎり、労働者は資本家にはなれず、資本のもとに永久に隷属せざるをえないのである。これが、マルクスのいわんとするところである。

だから資本家は零落して、たとえば中小の資本家のように、労働者になることはあっても、労働者は資本家になることは原理的にありえないのである。つまり、投資をするものが資本家ならば、その資本家はまた利潤をわが物にする資本家そのものでなければならないのである。それ故、資本と労働、富めるものと貧しきものとの関係は、資本主義社会が存続するかぎり永久に変わらないのである。それゆえにまた、革命による資本主義社会の崩壊と社会主義社会の実現が課題となるのである。これがマルクスの理論であって、単に投資は主として利潤部分から、といった数量的な問題ではないのである⁶³⁾。

このように、ロビンソンは、マルクスの利潤（剰余価値）部分からの投資（マルクスの表現によれば蓄積ないし資本蓄積）を高く評価しているのであるが、これを彼女は、ケインズ流の投資＝貯蓄という概念を利用して、利潤率を次のように解釈し直している。いま s を利潤のう

63) エンゲルスはマルクスへ宛てた手紙で次のようにいっている。「イギリスのプロレタリアートが事実上だんだんとブルジョア化してゆき、その結果全国民中で最もブルジョア的なこの国民が、究極はブルジョアジーと並んでブルジョアの貴族とブルジョアのプロレタリアートをもつようになるだろう、ということだ。全世界を搾取している一国民においては、そのことは確かにいくらか当然の点もあるだろうが。」（マルクス・エンゲルス全集、29、280ページ。）

しかし、たとえエンゲルスのいうように、イギリスが全世界を搾取しているとしても、マルクスによれば、この搾取の果実はすべてイギリスの資本家のものとなるはずである。何故なら、国際貿易も国際投資もすべてイギリスの資本家が行なうものであって、イギリスの労働者が行なうものではないからである。資本の国内的活動を国際的活動に広げたからといって、マルクスのいう賃金の性格が変わるはずはないのである。イギリスの労働者の賃金が高まり、生活費以上の収入をえて、彼らが資本家的活動をしはじめたとしたら、それはマルクスの賃金論の誤りを証明するだけのものである。

ち貯蓄される割合, P を年間利潤, I を年間純投資, C を全資本ストックの価値とすると,

$$sP = I \quad \text{したがって,}$$

$$P/C = I/C \cdot 1/s$$

ここで, P/C は利潤率であり, I/C は経済の成長率 g であるから, 上式は結局, 利潤率は成長率の増加関数であり, 利潤に占める貯蓄 (= 投資) の割合の減少関数であるということを表示している⁶⁴⁾。

だが、これだけでは、利潤とは何であるか、利潤はなぜ生まれ、なぜ資本家がそれを我ものにできるのかという説明にはなっていない。この点ロビンソンは、正統派経済学の利潤概念を批判しているわりには、あいまいである。しかし、マルクスの利潤概念には同情的である。彼女はいつている。「マルクスと正統派経済学者との間の著しい相違は、剰余の概念にあらわれている。……（正統派経済学者は）賃金、利子、利潤を一緒にして、これを『人間の努力と犠牲に対する報酬』とみている。このように、仕事から得た所得と財産から得た所得との区別から注意をそらし、利子と利潤に対する道義的正当性が付与されるのである。」⁶⁵⁾。「しかし、資本を所有することが、生産的な活動でないということは重要である。アカデミック経済学者は、資本が生産的だと教えることによって、資本家たちは社会から感謝されるべきであり、彼らの財産から所得を得ることは当然であるということをほのめかしていた。」⁶⁶⁾。

確かに、ロビンソンのいうように、資本の所有だけから所得は生まれないであろう。しかし、資本の国有からもそれは生まれないし、労働力の所有からも生まれない。いずれにしても、所得を生むためには、生産要素は所有されるだけではだめで、それは使われなければならない。しかしまた、使われるためには、先ず所有されることが必要である。一般に自分が所有しているものが、一番、使い易いはずである。このことは、労働力でも資本でも同じである。このことを理解しないで、資本の私有を排除したソ連や東欧の社会主義が、経済的に生産諸要素をいかに非能率的に、無駄に使ったかは、周知の通りである。

マルクスの社会主義をはじめとして、ユートピア社会主義やアナーキズム社会主義その他すべての社会主義が、所有することは価値を生まないという理論から短絡的に、財産の所有、事実上は財産の私有による所得の獲得は悪であるという思想に陥り、それが、生産要素の公有とか国有とかを正当化し、これまで、いかに社会に害をおよぼしてきたかを、ロビンソンは残念ながら理解できなかったらしい。政府の経済への介入を好むケインズ主義左派であり、かつマルクスに同情的であった彼女に対して、こういつて彼女を批判してもあるいは無理かもしれないが。（もっとも、だからといって、資本所得と労働所得が全く同じ性格のものだというわけ

64) J. Robinson, "A Reconsideration of The Theory of Value", op. cit., p. 178, 山田訳, 前掲書, 276ページ。

65) J. Robinson, "An Essay on Marxian Economics", p. 52, 戸田・赤谷訳, 73ページ。

66) J. Robinson, ibid., p. 18., 訳, 22ページ。

ではないが。)

10. ケインズ・ロビンソン・マルクス

ケインズは、マルクスの資本論を宗教書と呼んだ。彼は、資本論を全く読まなかったわけではないようだが、彼とかなり関係の深かった彼の弟子とっていいロビンソンが、ケインズのマルクスに対する態度を非難しているところを見ると、あまり、真剣にマルクスを読まなかったことだけは確かなようだ。

ケインズは、彼の「一般理論」を発表し、特に名声と地位と富をえてからは、その思想を広め（そのかなりの部分を彼の弟子たちが行なったのだが）、その思想を国内外の政策に生かし、かつ実践していくことに専念していったと思われる。ケインズは自分の理論および思想に絶対の自信を持ち、およそマルクスのような形而上学と科学を混同したような、同じようなことをクドクドと大げさに述べるものに我慢がならなかったのであろう。とくに、彼がソ連—ネップの時代ではあったが—を訪問してからその気持ちが強くなったのかもしれない。

ロビンソンは、ケインズとは違って生涯経済学者として悩み続けたようにみえる。マーシャリアンとして出発した彼女が、後にケインジアンとなり、さらにケインズにも物足りなさを感じると、マルクスを理解しようとし、マルクスの考えを取り入れようと努力したと思われる。マルクスの形而上学的、宗教的側面を捨てて、その科学的側面を生かそうと考えた彼女であったが、結局失敗したと見るべきだろう。しかし、彼女は、先進国でも多く見られる貧困層の存在や貧富の格差、世界的には、アフリカ、アジアなど途上国における膨大な数の飢餓あるいはそれに近い状態にある低所得層の存在、さらに度重なる大小さまざまな戦争などが、その解決にはほとんど無力に見えた新旧古典派の、ケインズ主義の、そしてマルクス主義など既存の経済学—その中には彼女自身の経済学も含まれていたのだが—に、怒りに近い強い不満を感じたのであろう。

繊細な女性的感性を持つロビンソンにとっては、貧しいものや虐げられた者の味方にみえるマルクスの思想や経済学は、心情的にはある親しみを感じたものと思われる。しかし、彼女はマルクスを経済学上の友とするには、あまりにイギリスという自由主義と経験主義と合理主義の空気を吸いすぎていたのである。彼女のすべての既存の経済学に対する不満は、「経済学の第二の危機」⁶⁷⁾という彼女の論文に端的にあらわれているが、これはまた彼女自身の経済学の危機でもあったのである。あるいは彼女は経済学者としてはあまりに悩みすぎ、バランスがいうように、最終的には経済学の領域から抜け出てしまったのかもしれない⁶⁸⁾。しかし、ロ

67) J. Robinson, "The Second Crisis of Economic Theory", C.E.P. vol. 4., p.p. 92~105., 山田訳, 「資本理論とケインズ経済学」, 301~319ページ。

68) 宮崎義一, 前掲書, 「ロビンソン: 経済学の考え方」, の「訳者後書き」245ページ参照。

ビンソン亡き今日、新しい経済学の要求がいわれていることを思うとき、ロビンソンの悩みも無駄とはいえないであろう。

マルクスは、生涯、一筋に自分の考えた思想に忠実に、その体系化に没頭していった。彼の悩みは、自分の思想や理論そのものに対してではなく、自分の思想や理論の体系化とその実現が、未完成に終わるのではないかという悩みであった。マルクスはケインズ以上に自分の理論に絶対的自信を持っていたといえる。

しかし、絶対的自信・信念と信仰とは紙一重である。一般に信念とか信仰とかいうものは、現実存在するものに対しては生じるものではない。目の前にあるものや、誰でもが確実に存在することを認めているものに対しては、信念とか信仰とかは必要ないからである。信念とか信仰とかは、現実には存在しないものに対して、存在しているはずだ、あるいは存在するようになるであろうと強く思い、かつ自分にいいきかせるということから生まれる。だから、社会科学を含め科学者にとっては、予見とか予想とかいうものは、かなり慎重でなければならないだろう。それが実際に社会に多少とも影響があるものについては一層そうであろう。絶対的自信や信念が媒介となって、科学的理論といわれたり思われていた思想や理論が、実は宗教であったり、宗教に化すということは、我々がいくらかでも経験してきたところである。

マルクスの抽象的人間労働とか価値とかは現実には存在しないものである。存在しないこれらを基礎概念として現実の資本主義を分析し、社会主義の到来を予見しようとするのだから、信念や信仰を必要とし、これがマルクスの理論を宗教的なものとする主要な原因である。

われわれも、マルクスの経済理論にはまったく利用価値がないとは思わない。この点では、ロビンソンに賛成である。たとえば、再生産表式などその例である。しかし、これに利用価値があるのは、この表式には価値概念など全く使われていないからである。使われているのは、ただ数字だけである。マルクスはここで使われている数字をただ価値と呼んでいるにすぎない。ロビンソンはマルクスの理論から価値概念を取り去ればよいといっているが、別に取り去らなくても、もともと価値概念が使われていないものが、いくつか理論として利用価値があるだけである。マルクスの理論の中で、価値概念を使っているもの、少なくとも価値概念を利用しなければ理論として成り立たないようなものは、どんな理論でも利用価値はないといっていいと思う。

われわれはケインズのように、マルクスのすべてを宗教だといって、これを斥けるつもりはない。哲学や歴史学の専門家でなくとも、これらにマルクスの考え方がかなり参考になるであろうことは推測できる。しかし、経済学に関しては、マルクスのものは、部分は別として、その基本的骨格あるいは構造において、ケインズとともに宗教的だといっていいと思う。